

平成28年度 第9回 未来創造セミナー実績報告（加筆修正版）

平成29年2月17日（9月14日加筆修正）
草津市総合政策部草津未来研究所
アーバンデザインセンターびわこ・くさつ

1. 平成28年度未来研究所事業 未来創造セミナーの目的

平成27年度は、草津市、特に南草津駅を中心とした地域の課題解決には「気軽に自由に議論や話ができる空間が演出され、常に新しい出会いが創造」される場が必要との過去の調査研究等の提言を受け、常設拠点の必要性の確認と常設拠点を設置した場合の運営手法やプログラムの検討を目的に「未来創造セミナー」を6回開催しました。その結果、このような家庭でも学校でも職場でもない、いわゆる第三の場所“サードプレイス”が南草津駅には必要であることがわかりました。

一方で、大学との連携強化プランを検討する草津市大学地域連携強化プラン懇話会を設置し、新たな大学と地域の連携拠点として全国11か所で展開されているアーバンデザインセンターの一つとして、（仮称）アーバンデザインセンターびわこ・くさつ（UDCBK）を開設することが了承されました。

平成28年度は産学公民連携のプラットフォームであるアーバンデザインセンター（平成28年10月15日（土）に市民交流プラザ内に開設予定）を拠点として連携・協働の土壌づくりを目的に未来創造セミナーを開催します。

2. 未来創造セミナーの目的

平成27年度の未来創造セミナーの試行結果、及び草津市大学地域連携強化プラン懇話会における議論等を踏まえ、アーバンデザインセンター事業として実施する平成28年度の未来創造セミナーについては主に次の二つの目的で実施することとしました。

	機能	内容	回数
未来創造セミナー	交流	多様な人々の交流を目的に草津の歴史や草津に住む人々のライフストーリー等を語ってもらう場	4～6
	連携	産学公民連携により、草津の未来のイメージを具現化するアイデアを纏め、社会実験等に接続	4～6

3. 第9回 未来創造セミナー概要

(1) テーマ・目的等

- ① テーマ：『備える防災』から『イツモの減災』へ
- ② 内容：いつもの行動が災害時の減災につながる「イツモの減災」について、2月11日に開催された「お買い物de防災@イオンモール草津」の事例を交え、お話しいただく。
- ③ 開催日：平成29年2月17日（金曜） 10時から12時
- ④ 開催場所：草津市市民交流プラザ 中会議室（フェリエ南草津5階）
- ⑤ 講師：山口洋典 氏（立命館大学共通教育推進准教授・災害復興支援室副室長）

(2) 当日のスケジュール

2 スケジュール

第1部 10:00~10:15
「アーバンデザインセンターびわこ・くさつ」ご紹介
アーバンデザインセンターびわこ・くさつ 溝内 辰夫

第2部 10:15~11:55
『備える防災』から『イツモの減災』へ！
立命館大学共通教育推進機構准教授
災害復興支援室副室長
山口 洋典 先生

11:55~12:00
アンケート記入（今後のスケジュール）
記念写真



4. 第9回未来創造セミナーの内容について

冒頭 溝内 辰夫 (UDCBKシニアディレクター) より
UDCBK概要・UDCBKと防災の関わりについて説明

- (1) 山口 洋典 氏 (立命館大学共通教育推進機構准教授・災害復興支援室副室長) による
話題提供
テーマ: 『『備える防災』から『イツモの減災』へ』

① 集団の力学に向き合って 2つの震災のあいだ

学生時代、平成7年1月17日に発生した阪神・淡路大震災の被災地へ駆けつけた際に、「何かしよう」という想いは相手が居てこそ成り立つということに気づかされました。“押しつけの善意は、善行でない”。善いことをしたいと思っても、結果としてそれが善い行いになるかは別物です。一方的な善意は「ありがとう」を期待し、結果として被災者を傷つけてしまうこともあるのです。

そういった経験から、人と一緒に心に響く言葉を探っていくことが相手とより良い関係を築けるということに気がつきました。この言葉探しの中で「まちづくりは借り物競争」という言葉が浮かびました。

現代は「知恵の借り物競争」です。以前は、近所で物の貸し借りや、人手を借りるということがありました。現代は、知恵や情報の貸し借りが必要です。人に頼り、知恵を借りることが新しい発想を生み出す原動力となります。

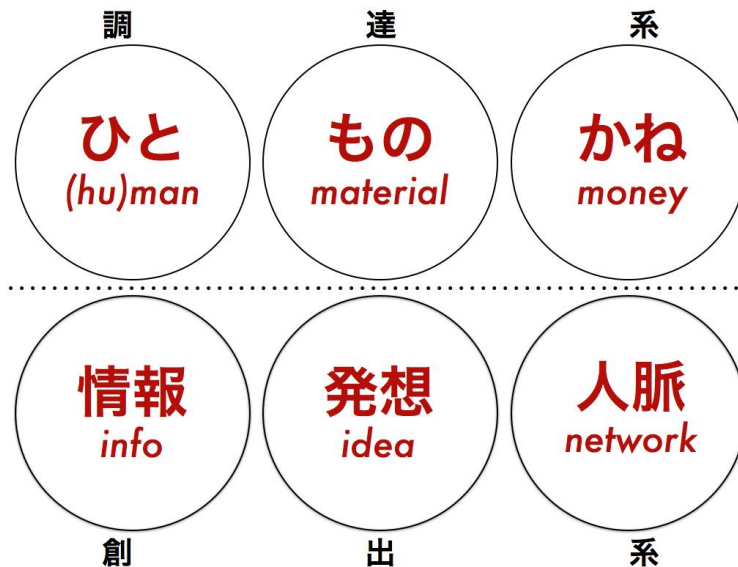


図 1. 問題解決のためには「仲間」と「物語」をつくる (講師のスライドより)

②「被災地のリレー」の視点から 被災と未災を結ぶ支援

平成 16 年 10 月 23 日に発生した新潟県中越地震では、阪神・淡路大震災の知恵が活かされないことがわかりました。“災害は「潜在的」な社会変化を「顕在化」し加速する”とされています。つまり、災害時には日々の生活があぶり出されるということです。

たとえば、災害時に障がいのある人が逃げ遅れるという問題があります。そこには、個人情報保護法などを理由に、近所の住民は障がいのある人が住んでいることに気がつかないという潜在的な社会変化が理由のひとつにありました。震災時に、そういった社会変化があぶり出されたことがきっかけとなり、障がいのある人たちがどこに住んでいるかわかるようにしよう、災害時には助けに行く役割を決めよう、という働きかけが起りましたが、誰が助けに行くのか？などの問題が出て、結果として助け合いからは遠ざかってしまいました。

また、阪神・淡路大震災では「現地再建」が災害復興の中心でした。家、ビル、道路が災害により倒壊した場合、同じ場所に生活や建物を再建していくことが復興の基本でした。しかし、新潟県中越地震では地域（豪雪地帯など）によっては現地再建が難しくなり、住民が半分に減る地域もありました。

そういった状況の中で、阪神・淡路大震災で被災し支援を受けた人たちが「恩返し」ではなく、“あのときもらった恩を、次の場所へ送る”という「恩送り」の思いで、新潟県中越地震で被災した人の想いに寄り添っていました。

その後、新潟県中越沖地震や東日本大震災の災害を経験するごとに、「恩送り」のリレーが繋がり、増えています。

被災地にはいろいろな場所からたくさんの支援が入ってきます。たくさんの支援の矢印が被災地に向いていきます。被災地にはその支援をどう受けるか、という心構えが必要です。



震災を知らない世代「未災者」への教育も大切になってきます。未災者への教育プログラムを行っています。（※約 1 分 30 秒の映像を視聴）

《内容》

阪神淡路大震災で被災した女性が生前に、ある同じ場所の震災前と震災後の変化を撮影。その後、被災経験の無い立命館大学の学生が 3 枚目の現在の状況を撮影し、震災時から復興への経過を追体験する。

「テレビ大阪『夕方 7 チャンネル』

被災女性の遺志―“定点”で見続ける神戸」（平成 26 年 12 月 22 日放送）

こういったプログラムの他にも、東日本大震災で被災した檜葉町で住民のみなさんへのインタビューも行っています。（※約 1 分の映像を視聴）



写真 2. 映像のようす

《内容》

福島県檜葉町に出ていた原発事故による避難指示の解除に合わせ、立命館大学の学生が町民へインタビューを行い、町民の故郷への想いを記した日めくりポスターを作成。

「フジテレビ『FNN ニュース』

檜葉町“避難指示解除”前日の動き」（平成 27 年 9 月 4 日放送）

その他にも檜葉町の住民のポスター（※詳細は立命館災害復興支援室のホームページ参照…<http://www.ritsumei.ac.jp/fukkor/special/detail/?id=2>）を制作することで、学生たちが被災した人の人生を引き受けて、丁寧に人と関わり、学ぶことができます。制作したポスターは檜葉町の公民館に預けました。日めくりで毎日違うポスターを掲示してもらうことで、毎日の生活にささやかな変化があるかもしれないという考えで預けてきました。

こうした活動のように、自身が現場に関わり物語を作ることで、“私とあなた”の関わりが深まっていくだろうと考えています。

③「あの日」と「その日」を結び 防災から減災へ

災害復興の支援に関わった経験や研究を活かして、経験を地域に馴染むように整えて防災の活動にも取り組んできました。

たとえば、吹田市では「ぼうさい探検隊」を実施し、地域の子どもたちが夏休み中に地域を探検し、マップを作成するという取り組みを行いました。大人が準備した防災訓練ではなく、子どもたちが自ら防災に取り組むことで子どもたち自身が学んでいくことができます。茨木のイオンモールでは「防災グッズ買いものコンテスト」と題し、“1,000円を目安に、防災を意識した商品を参加者が購入し、購入品を披露し、講評する。”という取り組みを行いました。（※詳細は立命館災害復興支援室のFacebookページによる報告を参照 … <https://www.facebook.com/fukkoR/posts/753224558056106>）

次に、茨木のイオンで行った「防災グッズ買いものコンテスト」をベースに平成29年2月11日にイオンモール草津で「お買いもの de 防災@イオンモール草津（開催）」を実施しました。きっかけは平成28年3月28日に立命館大学BKCで行われた「ボランティア・サービスラーニング研究会」で草津市の危機管理課や防災おにぎり委員会の方と知り合ったことです。

今回の企画内容は茨木での取り組みと同様で、防災のための商品を購入し、披露して講評となっています。この取り組みについては「お買いもの de 防災@イオンモール草津」に参加した学生が説明役を担いました。

【立命館大学 学生 上田さんによる、お買いもの de 防災の説明】



写真3. 上田さんによる説明の様子

大学での専攻は生命科学で、防災とは関わりの無い分野ですが、出身地である熊本県が、平成28年熊本地震により大きな被害にあったことがきっかけで防災について考えるようになりました。震災による故郷の変化や被災地での体験は、防災に何が必要なのかを考え

させられました。この熊本県での経験が、草津でも何か活かせるのではないかと思います、「お買い物 de 防災@イオンモール草津」の企画への参加のきっかけとなりました。

この企画は、“災害時、3日間の避難を想定したお買い物”なので、熊本のように最初の地震から数日経って再度大きな地震があることや、草津市で一人暮らしをしている今、被災したらどうするかなど、いろいろなシチュエーションを考えて取り組むことが大切です。

また、買い物だけで終わらずに、その後購入した商品をどのように使ったのか経過を知ること大切なことです。その経過を広めるために、ソーシャルネットワークを上手く利用できるということもわかりました。

同じ大学の学生参加者は、ショップで《水2ℓ・チーズ・ガーゼ・テープ・ウェットティッシュ・雨合羽・野球バット》を購入していました。水をあまり飲まない、食欲が無いという理由から食料が少なめなこと、不審者を撃退するために野球バットを購入したことなど、本人なりのシチュエーションがあつての購入品となりました。

今回の企画では、参加者が防災を想定した買い物を通して、他の参加者が何を購入し、どう使用するのかを知ることができ、また、購入した商品を実際に使用することで、“自分だったらこう使用する”、“(自分とは違う状態の人なら) こういう使い方ができる”という他者理解を深め、感想を共有できたことが大きな成果と言えるでしょう。

【文案：セミナーの当日には参加された10名の中から、2名の方にお越しいただきました。当日の記録係を担った学生からの報告に続き、実際に購入したものをどのように使ったのか、講師が聞き手となり、ご自身の体験をご紹介いただきました。】

【山口先生と参加者（Yさん・Mさん）のフリートーク】（約20分間）

山口先生	それぞれ購入した商品の紹介をお願いします。
Yさん	“災害時にはまず食べよう”と思い、食をイメージして買い物をしました。 ・水 ・カップヌードル ・保存用包装米飯 ・親子丼の素 木の枝や新聞紙を燃やせば食品を温め、お湯を沸かせると思い、以上の食品を購入しました。 (Yさんはその他にも懐中電灯とツナ缶を購入)
山口先生	懐中電灯の購入理由を教えてください。
Yさん	災害時の暗闇の中で光が必要だと思ったからです。

山口先生	次に M さん、お願いします。
M さん	食べ物、飲み物がある程度家の中にある設定で買い物をしました。 <ul style="list-style-type: none"> ・おむつ（子どもに必要なだから） ・水 ・スナック菓子 ・食品用ラップフィルム（お皿を汚さずに済むから） ・おしりふき これらの商品を購入しました。
山口先生	実際に使ってみた感想をお願いします。
Y さん	保存用包装米飯は、そのまま食べられると思っていました。 電子レンジを使用して食べるものと知りませんでした。 電子レンジで温める代わりに、水を入れてみましたが、まずくて食べられませんでした。 温かいお味噌汁を入れてみたら、食べられました。 温める必要があるので、外で木の枝や新聞紙を燃やして、鍋でお湯を沸かし、商品をビニール袋に入れ、鍋の中で温めたら食べることができました。
山口先生	なぜ外で木の枝や新聞紙を燃やして、鍋でお湯を沸かしたのですか？
Y さん	自宅が半壊になり、ガスが使えない設定のためです。
他の参加者	もし、次も参加するとしたら何を買いますか？
Y さん	ビールを買います。
山口先生	茨木のイオンモールでこの企画を開催した際に、 お酒 1 升瓶を購入した参加者がいました。 どうするのか聞いたところ、「お酒と周りの人の何か（食べ物など）を交換できる」と答えられました。 おもちゃを買った人もいますが、すぐに飽きてしまったという感想もありました。また、オール電化でないためガスは使えるが、単 2 電池が必要になるということで購入した人もいます。 では M さん、お願いします。
M さん	若者からスナック菓子にお湯を入れたらポテトサラダになると聞き、代わりに水を入れてみましたが、美味しく食べられました。

	<p>おむつについてですが、大人のトイレの回数は1日約5～8回で、1回に約200～400mlの尿を排泄します。 水で実験してみたところ、子ども用のおむつで800ml吸収することがわかりました。 一度子どもが使用したおむつでも、2回使えることがわかりました。 子どもの肌はデリケートなため、できるだけ交換してあげたいです。</p> <p>子どもが一度使用したもので、まだ十分吸収できるのに捨てるのはもったいないと思い、実験しました。</p>
<p>山口先生</p> <p>他の参加者</p>	<p>本日不参加の方の購入品について説明をお願いします。</p> <p>参加した学生の中で、 防寒対策として食品用ラップフィルムを体に巻く実験をした人がいましたが、結果としては皮膚呼吸ができず、睡眠不足になるとのことでした。</p> <p>大学生参加者は何を購入するかで大変悩んでいました。 中には購入金額1,200円のうち、700円ほどをチーズに使った人がいました。二度とチーズは食べたくないとの感想でした。</p>
<p>山口先生</p>	<p>ありがとうございました。 それぞれが工夫することが大切です。 防災には正解、不正解がありません。 正解ではなく、最適解（その場の正解）を創り出すことが大切です。 自分が置かれた状況を整理した上で、どうしていくべきか・・・ 最適解を出すには、適切な問いを持たなくてはなりません。</p> <p>たとえば、自分の家はプロパンガスがあるが、使えないときはどうするのか？自分の子どもは今1才だが、3才になったときには何が必要になるのか？などの問いをきちんと持たないと、正しいのか間違っているのかもわかりません。この防災グッズを持っていればよいではなく、それぞれがどのように備えるか、“まさか”のときをいつも考えることが大切です。</p> <p>防災は災いを防ぐ、減災は災いを減らすと書きます。 災害そのものは減らすことができませんが、どうすれば被害が最小限にとどまるのか？という問いを考え、向き合うために、今回の取り組みを開催しました。</p>

防災大喜利

過去に開催した「防災大喜利」で出た答えを紹介されました。

➤ 「いのち」の三文字であいうえお作文

テーマ：いのちを守るために

- | | | |
|--------|----------|-------|
| • いつでも | • いのいちばん | • いちご |
| のびのび | 飲まず食わずで | のり |
| ちからもち | ちからつけて | チーズ |

➤ 「防災」を入れた川柳

- 防災は 忘れぬ人に 効果あり
- 防災は 皆で守る 決まりごと
- 防災は 訓練だけで 守れない・・・など

➤ 防災名言集

『防災は1%の〇〇と、99%の〇〇である。』“〇〇”の部分の言葉を考える。

- 防災は1%の「発想」と、99%の「習慣」である。
- 防災は1%の「予想」と、99%の「心構え」である。
- 防災は1%の「気持ち」と、99%の「行動」である。

セミナー内で出た意見

- 防災は1%の「怖さ」と、99%の「ワクワク」である。

④次の災害に向き合うにあたって 「支援力」と「受援力」のよい均衡を図る

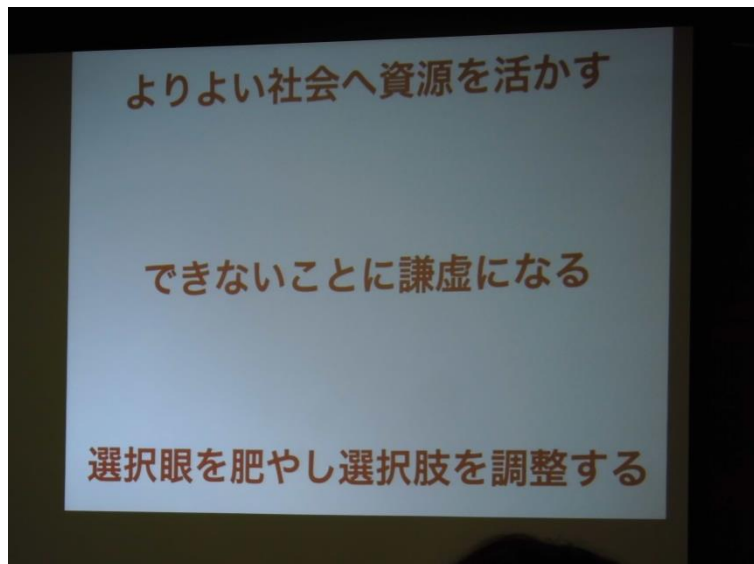


写真4. 話題提供のようす

東日本大震災が発生する少し前から、災害が起きたときに助けに行く人たちの想いや力量を「支援力」、助けを受ける人たちの力を「受援力」と言われはじめました。支援する人たちの想いを、支援を受ける人たちの心構えができていないと、支援が活きないと言われていています。

受援力は日々の暮らしの中にこそ表れます。

「防災は大事だ！」と思うが故に、自分たちでできることを自力で、と考えてしまいがちですが、防災には「助け合い」、「相互扶助」という面もあります。実際に、被災した際に支援を受け、その後支援する立場になって初めて肩の荷が下りたという人がいます。支援を受けることが心苦しかったと感じる人もいます。

日々の生活の中でも、「大丈夫です」ではなく「ありがとう」と言えることが大事ではないでしょうか。

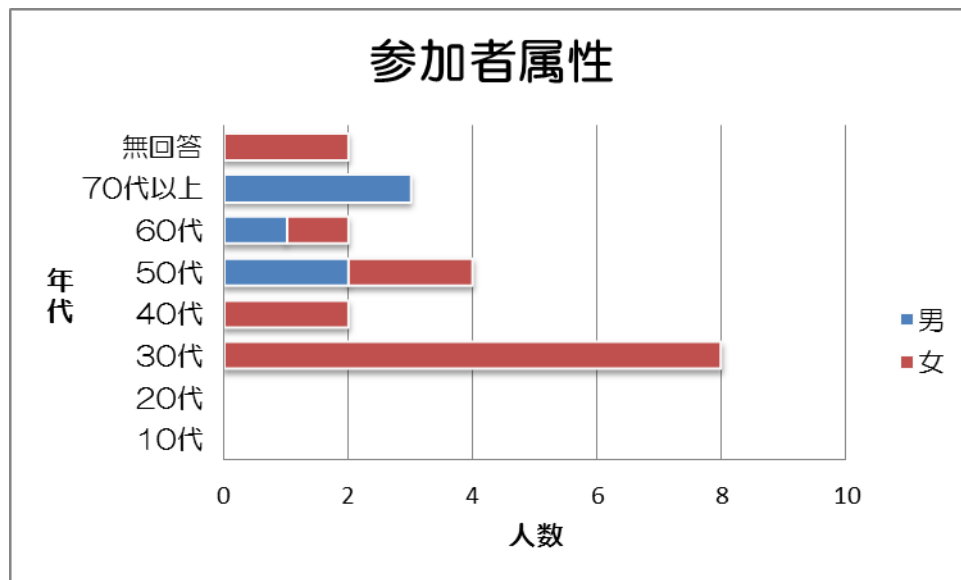
被災した人に「何か支援できることはありますか？」と尋ねると、「災害が起きる前に時間を戻してほしい」という言葉が返ってきました。時間を戻すことはできませんが、これからの時間の変化をより良くしてくることが大切です。

防災は備えれば備えるほど難しい局面が出てきます。身構えしすぎると、「自力でなんとかかしていこう」という思いが強くなり、相手の優しさや想いを受け入れられなくなることになってしまいます。それぞれの適度な構え、適度な備えと同時に適切な問いを持ってください。

これができていない、あれが無いと粗探しするのではなく、良いところをより良くしていくと同時に、できていない部分は目を瞑らず向き合わなければなりません。

できないことに対して謙虚になり、互いに人と関わっていき、活用の選択肢を広げていきましょう。

5. 未来創造セミナーとしてのまとめ



開催時間が平日の午前中ということもあり、子育て世代の方々の参加が多く、学生や男性参加者が少ない結果となりました。また、今回のセミナーは2月11日（土曜）開催の「お買い物de防災@イオンモール草津」企画から派生したということもあり、お買い物de防災の参加者が多く来られていました。

問	よく分かった	分かった	まあまあ分かった	あまり分からなかった	分からなかった	合計
UDCBKについて	14	4	1	0	0	19 (無回答 2)
問	非常に有意義	有意義	まあまあ	物足りない	非常に物足りない	合計
講演内容について	13	5	1	0	0	19 (無回答 2)
問	大いに活かせる		活かせる		ほとんど活かせない	合計
今後活かせるか	16		4		0	20 (無回答 1)

セミナーの内容としては、防災について具体的な話題も多かったことから、今後活かせるとの評価を得られる結果となりました。

➤ アンケート内容

- 参加しなければ気付かない事だらけで参加して良かった。気付きは次につながる！
- 防災を日常に感じて行動することが減災だと思いました。防災は1%の知恵と99%の人とのつながりである。
- 山口先生の一つ一つの言葉、メッセージが心にひびきました。伝える側になることで自分自身も学び「問い」を考えていきたいと思いました。異世代の交流を経験できる機会を作してほしい。
- 普段から意識して、何か行動・やってみる・想像してみることが大切だと感じた。人とのつながり、交流を普段からもっておくことも大切にしたい。実際に想定して買い物をするのは、自分もしてみたいと思った。
- 防災を受信者の立場でも考える必要があるというのは目からウロコでした。
- 本当に必要なこと、“防災のため”を越えて教えていただいたような気がします。こういった防災のセミナーは単発じゃなくて、これからも続けて開催してほしいです。
- 地域においてこのように防災啓発を進めていくか少しヒントをもらいました。
- 今回参加して思ったのは、物を備えるだけではなく、実際に試してみることの大切さ。使ってみてわかることの多さを知りました。あと、非常時も日常があればホッとする。これも大切なことですね。今日のセミナーをきっかけに、少し考えてみたいと思います。ありがとうございました。

➤ UDCBKとしての成果

UDCBKの目的は「草津のいろいろな未来のイメージ（選択肢）の展示室」です。これは現状当たり前だと思っていることに疑問を感じ、代替案を考えていくことです。今回はそうあらねばならないという支配的なストーリー（ドミナント・ストーリー）を見直し、個々人の文脈に即した代わりのストーリー（オルタナティブ・ストーリー）を考えるきっかけでもあります。この点については、実際の購入したものを使い、その経験を話されたことは、今後UDCBKがいろいろな未来のイメージ（選択肢）を考える上で参考になったと思われる。

➤ 今後の課題

今回のセミナーは、「お買い物de防災@イオンモール草津」の派生企画のため、本セミナーへの参加者はお買い物de防災への参加者が多く、開催時間の関係もあり、学生や働く世代の参加者が少ない結果となりました。防災という多世代に共通した話題であるため、より多くの方々に参加していただくためにも、開催日等の調整が必要です。また、防災については近年の災害状況から広く関心を持たれる話題であるため、今後もさまざまな企画で継続すべきであると考えています。